

Malory における *do*-form について

中 尾 祐 治

1

マロリーの八篇の散文ロマンス(勿論、全体が統一された一つのロマンスという説も有力であるが)は1469—70年迄には完成されたと考えられているが、マロリー自身の MS. は消失して現存しないから、現在利用出来るものは1485年に Caxton によって印刷された Caxton 版(以下 Sommer の翻刻版¹⁾を使用、**Cx** と略称)と1934年に Winchester College の Fellow's Library で発見され **Cx** とほぼ同時代の Winchester MS. (以下 **W** と略、Vinaver による校訂版²⁾ 使用)の二つである。Caxton の印刷活動については、彼は単に機械的に写本を印刷したのではなく、色々な addition や omission を行い、更に自己に気に入るような語形や語法に書き換えを行う習慣であったことは、よく知られている事実であるが、マロリーの作品の Caxton 版 (i. e. *Le Morte Darthur*) についても同様なことが云えよう。このことは先に筆者が、**W** と **Cx** の「指示代名詞³⁾」、「動詞の屈折語尾⁴⁾」について調査した結果からも明らかであるが、*do*-form についても **W** の発見以前はマロリーの語法と考えられてきたものが、実は Caxton の書換えによるものであるかも知れない。そこで以下行う調査の第一は、**W** と **Cx** を比較し、両者の *do*-form の現われ方の相違を明らかにすることである。勿論その際、相違する場合の **Cx** の部分が、Caxton の一般的語法と合致するか否か検討する必要がある。

このように **Cx** と **W** の比較により Caxton のつけ加えを明らかにした後、**Cx** と **W** の共通な部分と、残りの **W** の部分について *do*-form の実態を記述し、マロリー自身の *do*-form の用法を推定することが本稿の第二の目的である。**W** は多くの点で、**Cx** より complete で authentic であると考えられているが、マロリーの original な MS. ではないので推定の手掛りとなる材料を提供するにすぎないことはいうまでもない。

尚マロリーの *do*-form について、ごく概略的には Baldwin⁵⁾ と Sommer⁶⁾ の記述があり、又 Engblom⁷⁾ も *do* の総合的な研究の中でマロリーにも言及している。しかしこれらは **Cx** についてのみであり、**W** は考慮されていないから、今日から見れば不完全である。Ellegård⁸⁾ では **W** も考慮されていて、利するところが多いが、膨大な歴史的研究の一端として取扱われている点に限界がある。そこで、ここでは筆者の企てているマロリーの英語の基礎調査の一環として、以上の調査を試みるわけである。

ところで問題となる15世紀後半は、この世紀の初頭頃より散文にも現われ始めた、肯定平叙文における「無強勢の *do* + 不定詞」構文もかなり popular になり、同時にこの構文と同形式で意義の異なるため、polysemic conflict の結果、この後急速に姿を消す運命にあった古い「使役の *do* + 不定詞」構文も依然として勢力を占めていた。更にこの頃「強調の *do* + 不定詞」構文も次第に擡頭し始めていた。又15世紀初頭を前後にして出現し始めた否定文・疑問文における迂言の *do* も、この時代には漸次増化をみせ、要するに迂言の *do* の出現と発展にま

つわって、亡び去った古い用法と、今日確立している用法のほとんどすべてが、共存していた時代であった。だから例えば、W 502/17 and so thus he *ded* lete make and countirfete lettirs……のような例に出会う時、多くの解釈が可能で、*ded* は代動詞にも本動詞にもとれ、かつ又使役の *do* にも迂言の *do* にもとれ、更に使役でないと考えられる場合、無強調の *do* にも強調の *do* にも解せられ、分類に困難を感じる場合も起こるのである! 上述の各研究書で、同一の文例に対して異なった分類処置がとられたり、解釈に微妙な nuance の相違が生じる場合もあるのはこうした時代背景のためである。以下マロリーの *do*-form にまつわるこれらの問題点についても明らかにしながら、上に述べた二つの問題に立ち入って行くことにする。

2

本稿の表題の *do*-form とは「*do*+不定詞」の形式を指し、*do* が使役の意を持つ場合、純粋な迂言用法の場合、強意の場合等、この形式の *do* が担いうる、すべての意味を含むことにする。次に第一図をみると、表の一番左の欄が W に現われる *do*-form の各構文とその実例数を示し、その一行おいて右をみると Cx ではそれらが如何なる形に対応しているかを示している。同様に一番右の欄は Cx に現われる *do*-form の各構文で、その一行おいて左は、それらの W における対応状況を示す。中央の各線は W と Cx の *do*-form 間の対応関係を示し、左右の欄の各対応線は一方の *do*-form が、他方では *do*-form 以外のものに対応している場合を示す。

(第一図) W, Cx 間の *do*-form に関する対応表

W における 実 例 数	W の <i>do</i> -form が Cx の <i>do</i> -form 以外のものと対応	最左欄に対応する Cxの各type とその実例数	W, Cx間の <i>do</i> -formの 対 応	最右欄に対応する Wの各type とその実例数	Cx の <i>do</i> -form が W の <i>do</i> -form 以外のものと対応	Cx における 実 例 数
<i>do x</i> 39 (<i>do</i> +不定動詞 1例を含む)	(F)	<i>did do x</i> 1	(M)	単純形・その他2	(H) (E)	<i>do x</i> 33
		単純形・その他8		<i>let x</i> 1		
<i>do acc x</i> 7		<i>do x</i> 30	(A)	<i>do x</i> 30	(D) (B)	<i>did do x</i> 11 (<i>did acc do x</i>) (1例を含む)
		<i>do acc do x</i> 1		なし 4		
<i>do x</i> 6 (疑 問 文)	(G)	<i>do acc x</i> 6	(C)	<i>let x</i> 5		<i>do x</i> 6 (疑 問 文)
		単純形 1		<i>do x</i> 1		
<i>make do x</i> 1		<i>do x</i> (疑問文) 5	(S) (R)	<i>do acc x</i> 1	(K)	<i>do x</i> 6 (疑 問 文)
<i>do let x</i> 2	(O)	<i>make do x</i> 1		なし 1		
		<i>do let x</i> 1	(P) (N)	<i>do acc x</i> 6	<i>do acc x</i> 6	
<i>do never x</i> 4		表現異なる 1		(Q)	<i>make do x</i> 1	
		<i>do never x</i> 4	<i>do let x</i> 1		<i>do let x</i> 1	
				なし 1	(I)	<i>let acc do x</i> 1
				<i>let x</i> 1	(J)	<i>let do x</i> 1
				<i>do never x</i> 4		<i>do never x</i> 4
				なし 1	(L)	<i>do not x</i> 1

(注) acc=accusative, x=infinitive, 本文中でもこれらの abbreviation を使用。

これによると対応関係(A)(B)(C)(D)(E)と(F)(G)(H)の二つの group が注目に価いする。そこでまず最初の group から例示して検討を加えれば、

(A) **W** の *do x* が **Cx** の *did do x* に (1例)

W Also he *dud wryte* all the batayles that every worthy knyght ded of Arthurs courte 29/36 (**Cx** Also he *did do wryte* all the batails that euery worthy knyght dyd of arthurs Courte 62/9, 10)

(B) **W** の *let x* が **Cx** の *did do x* に (5例)

1) **W** So anone the kyng *lete ransake* sir Gawayne anone in his syght and sayde 152/24 (**Cx** Thenne the kyng *dyd do ransake* his woundes and comforted him 171/2)

2), 3) **W** The kyng *let bawme* all thes with many good gummys and setthen *lette lappe* hem in syxtyfolde of sendell large, and than *lete lappe* hem in lede 162/33, 34 (**Cx** and also syxty senatours of Rome all noble men/whome the kyng *dyd do bawme* and *gomme* with many good gommes aromatyk/and after *dyd do cere* them in sixty fold of cered clothe of Sendale 174/21, 22)

4) **W** Than the kyng in haste crystynde hym fayre and *lette conferme* hym Priamus, as he was afore, and lyghtly lete dubbe hym a deuke with his hondys, and made hym knyght of the Table Rounde. 173/12 (**Cx** thenne the kyng lete hym anon be crstned/and *dyd do calle* hym his firste name Pryamus/and made hym a duke and knyghte of the table rounde 180/33-34)

5) **W** he *lete make* lettirs as thoughe that they had com frome beyonde the see, 860/8 (**Cx** he *dyd do make* letters as though that they came from beyonde the see 839/1)

(A)(B)の例は **W** の「Causative *do*+不定詞」構文 (以下*do x c* と略) や *let x* を Caxton が *did do x* に書き換えているのであるが、これは要するに *do x c* と *do x p* (=「Periphrastic *do*+不詞詞」構文) との意味上の抗争に関係する問題である。*do x p* の起源と *do x c* との関係についてはすでに拙稿「Periphrastic *do* と Causative *do* との関係について¹⁰⁾」で問題点と私見を詳述したのでここではくり返さないが、とにかく *do x p* の発生と勢力拡大により、*do x* の形式を持つものが *do x p* か *do x c* か、判定不可能な場合が多々生じるという混乱がひき起こり、マロリーの時代はこの同形式で異義構文の間の抗争の末期の時代であった。

しかし二つが全く混乱していたというより、方言的な差もあり、又個人的にもいずれか一方へのかたよりが見られる。マロリー自身については、**W** で判断する限り、*do x* の形式 (勿論 *do acc x* は除く) のかなりの数が迂言用法であり、使役用法はむしろまれであった。一方 Caxton のこの点に関する言語習慣はどうであっただろうか。彼の *do x* の用法は概して云うならば、初期のものほど使役用法が多く、迂言用法はあまり見られず、そして年齢が増すに従って *do x p* の広範な使用が認められるようになる。Engblom (P. 95) の調査では「Caxton の作品で迂言の *do* が手広く使われるようになったのは *Blanchardyn and Eglantine* (1489) 以後である」ことが明らかにされている。こうした現象について Ellegård (P. 165) は、「Caxton は長く外国生活をしてきたから若い時、Kent, London で身につけた言語習慣を保存していたのだ。Kent や London では15世紀前半には主として *do* は使役の意で用いられていた。ところが新しい語法の影響を受け、英国での著述生活の途中で古い習慣を改めた。」と推定している。*Le Morte Darthur* の印刷は1485年であるから、まだ保守的な言語習

慣を捨て切れずにいた Caxton は、印刷に附すマロリーの MS. にかなり散在している *do x p* をみて、*do x c* の存在がおびやかされることに多少の低抗を感じたのであろう。一方 *did do x* なる形式は、*do x c* と *do x p* の意味上の抗争の結果生じたもので、*do x c* の補強された形である。これは *do x c* を愛好する人によって使用され、特に Caxton は *do x c* と共に広範囲に使用している。こういうわけで、MS. にわずかに存在する *do x c* を、*do x p* と同形式による意味のあいまいさを回避させるために、*did do x* と強化したものであろう。同時に *do x c* と同意義で、**W** にかなり現われる *let x* をも(B)の場合は、*did do x* で置換え使役の *do* の構文の数を増化させている。(A)(B)の書換えは、このように使役の *do* を好む Caxton の言語習慣を示すものであろう。

更に次の例では *do x p* との意義上の ambiguity を生じない使役の *do* の構文、*did acc x* までも、(A)の実例と同一文脈内に現われるために、それと歩調を合わせて、*did acc do x* に直している。

(C) **W** の *did acc x* が **Cx** の *did acc do x* に (1例)

W And all the batayles that were done in Arthurs dayes, Merlion *dud hys mayster Bloyse wryte* them. 29/35 (**Cx** All the batails that were done in arthurs dayes/merlyn *dyd his maister Bleyse do wryte* 62/9)

もとより *did do x* に関しては、*do x c* の補強という考えとは異なった解釈もある。即ち *did, do* 共に使役の意を有し、これが二重使役を表わすという説もあり、又 *did do x* の *did* が迂言の *do* という見方もある。しかし **W, Cx** の関係から判断する限りにおいては、**Cx** の *did do x* は **W** の *did x, let x*、に対応しているのであるから二重使役説はあてはまらない。後者の見方も、例えば Caxton 自身に関して云えば、*did do x* は迂言の *do* の少い初期の作品に多く現われ、後期のものになると現われ方が激減するから、妥当しない。同時に、一般的に云っても、*did do x* は Manning, Chaucer から Caxton に至る迄時々現われる語法で、実際には Caxton 程 extensive な用い方をした人はなく、Caxton 以前はまれに見出されるのみであるが、その場合のほとんどすべてが、迂言の *do* を避け使役の *do* の基盤の強い作品に見出されるからである。こういう事情から、これは *do x c* と *do x p* との polysemic conflict の中で *do x c* を強化し、*do x p* この分化、区分のために生じたもので、Caxton も **Cx** の中でこうした目的で書換えを行っていると思像できよう。

第一表で明らかのように、他に、**W** に対応個所のない *did do x* が **Cx** では 4 例見出される。

(D) **W** に対応個所なしで **Cx** では *did do x* (4例)

1), 2) **Cx** And after kyng Arthur *dyd doo ransake* the dede bodyes/and *dyd do burye* them that were slayne of his retenue euery man accordynge to thestate & degree that he was of 174/11 (cf. **W** And than relevys the kynge with his noble knyghtes and ransaked over all the feldis for his bolde barouns. 162/20)

3) **Cx** Thenne the kyng *dyd do calle* syre Gawayne/syre Borce/syr Lyonel and syre Bedwere/and commaunded them to goo strayte to syre Lucius 169/11 (**W**なし)

4) **Cx** and anon the kyng *dyd do asemble* his armye 70/35 (**W**なし)

W に対応個所なしというのは、これらが **Cx** の Bk V (pp. 160-182) にあたる部分に現

われるという事情による。同時に上の(A)(B)(C)と、この(D)の項目にあげた合計11個の *did do x* (*did acc do x* 1 例も含めて) を見直してみよう。これらが **Cx** 全篇に現われる *did do x* のすべてであるが、このうち8個迄が Bk V に現われていることがわかる。**Cx** の Bk V の部分は **W** では *Arthur and Lucius* の部分 (PP. 136-177) に相当するが、この部分だけは両方のテキストが parallel していない。これは衆知の如く、**W** のこの部分が、マロリーの第一作で、未だ彼の文体が確立していなく、種本となった14世紀末の North West 方言で書かれた頭韻詩に、語彙・文体・語形等の影響を受けていて、他の部分の言語状態と大いに異なるため (ただし *do*-form については他の部分と変らないが)、Caxton には異質的に思われ、印刷の時全面的に書き改めたためである。今触れたように **W** では *Arthur and Lucius* の部分をも含めて *do*-form の用い方は全篇を通じて大体同じである。Caxton は印刷しようとするマロリーの作品が、自己の言語習慣と異なり、*do x p* の基盤が *do x c* よりずっと強いことを見出した。そこで劣勢の *do x c* を *did do x* に強化して同形式のために生じる polysemic conflict を防ごうとした(項目(A)で例示したものを参照)。しかし Bk V は Caxton が MS. を逐語的に印刷に附すというのでなく、物語のすじだけを追って、MS. の長さの約半分に縮小し、自己の言語習慣に従って自分の表現で書き下したのである。当然、*do c* を多量に使用したかったであろうが、Bk V 以外の部分との調和を考えて差しひかえたのであろう。又 **W** で判断するとマロリー自身は *do x c* を *do x p* から形式上分化させる手段として *let x* を多く用いている。Bk V 以外は、**W** の *let x* を印刷の際かなり忠実にそのまま保存した。わずかな例外は(B)の(5)に例示した例文だけである。ところが、Bk V では逐語的に印刷に附したのでなく全く自由に書き改めたため、**W** では *let x* で表わされている内容を(B)の 1) 2) 3) 4) のように *did do x* で表現しているのである。このように **Cx** の Bk V は、**W** のすべての部分や、**Cx** の Bk V 以外の部分とは逆に、迂言の *do* より使役の *do* が豊富である。勿論 **Cx** の Bk V に迂言の *do* が皆無というわけではない。即ち、

(E) **W** の *let x* が **Cx** の *do x* に (1例)

Cx & ther with he *dyd commaunde* hys trōpettes to blowe the bloddy sownes
in suche wyse that the ground trembled and dyndled 173/9 (**W** and than he
lete blow up with trumpettes and with tabours, that all the vale dyndled. 158/24)

Bk V であるから一語一語の対応はない。したがって *dyd commaunde* が意味上直接 *let blow* に対応するわけではないから、**W** の対応個所なしという項目にしてもよい。とにかく **Cx** のこの *do x* は Caxton 自身の英語である。この *do x* を Engblom (p. 89) は使役に解している。Sommer の glossary や Ellegård は何も述べていない。一方 Baldwin (p. 86) は迂言の *do* としている。筆者は *do x p* とみなして差しつかえないと思う。その理由として 1529年の Wynkyn de Worde の edition (cf. Sommer, Vol. 1, P. 60) では 'And he there with *commaunded*' と単純形に変えられているし、又この年代の Caxton にとって、*do x p* の使用はまれではあったが、全く unfamiliar であったわけではないからである。ここでも *do x* を迂言用法に、*did do x* を使役に分化するという **Cx** 全体にみられる区分が貫かれているのであろう。

マロリーの作品を印刷した頃の Caxton は、上述のように、使役の *do* を広範に使う習慣を有していた。印刷に使用した MS. に自己の習慣に相反する *do x p* をかなり見出した時、*did do x* によって *do x c* を強化保存しただけでなく、MS. にみられた迂言の *do* を単純形に書換えることによって、その数を減らしていると想像される。これが第一表の(F)(G)である。

(F) W の *do x þ* が Cx の単純形に (8例)

a) 同一動詞の単純形に,

1) W And so one a tyme Merlyon *ded shew* hir in a roche whereas was a grete wondir and wrought by enchauntement that went undir a grete stone. 93/3 (Cx And soo on a tyme it happed that Merlyn *shewed* to her in a roche where as was a grete wonder/and wroughte by enchauntement that wente vnder a grete stone 119/37)

2) W For hereby dwellyth a knyght that woll not be overmacched for no man I know but ye *do overmacche* hym. 189/32 (Cx but ye *ouermatche* him 193/3)

3) W And than they *ded alyght* suddeynly 349/8 (Cx And thenne they *alyght* sodenly 346/14)

4) W 'I mervayle,' seyde sir Dynadan, 'that ye *do boste* behynde sir Trystram so,...' 400/36 (Cx I merueile said sir Dynadan þt ye *booste* behynde syr Tristram 397/1)

5) W Wyte [yo]u well ye shall *do fy(n)de* feaw fryndis 875/32 (Cx wyt you wel ye shal *fynde* fewe frendes 853/35)

b) 表現を変えて

6) W And anone as he was com Merlion *dud make* kyng Arthure that sir Gawayne was sworne to telle of hys adventure, 81/8 (Cx And anone as he was come merlyn *desyred* of kyng Arthur þt syre Gauayne shold sworne to telle of alle his auentures 109/6)

c) *do* を main verb にして

7) W 'Madame,' seyde sir Bors, 'that slyeve-berynge repentes me, but I dare say he *dud beare* hit to none evyll entent; but for thys cause he bare the red slyve that none of hys blood shold know hym. 770/24 (Cx but I dar say he *dyd* it to none euylle entente 751/21)

8) W But and ye be slayne I woll take my dethe as mekely as ever *ded* marter *take* hys dethe for Jesu Crystes sake. 822/33 (Cx but and thou be slayne I wyl take my deth as mekely for Ihesus Crystus sake/as euer *dyd* ony crysten Quene 801/30)

(G) 疑問文におけるもの : W の *do x* が Cx の単純形に (1例)

1) W 'Fayre felow,' seyde sir Ector, '*doste* thou *know* this contrey or ony adventures that bene nyghe here honde?' 181/22 (Cx Fayre felow said syre Ector *knowest* thou in thys cuntry ony aduentures that ben here nyghe hand 184/30)

ただわずかではあるが逆の例も見出される。

(H) W の単純形が Cx の *do x* に (2例)

1) W sir Palomydes speare brake, and sir Lamerokes *hylde* 493/34 (Cx but sir Palomydes spere all to brast and syre Lamorak *dyd holde* 487/16)

2) W And therewyth sir Trystromes shewed forth La Beale Isode and turned hir thryse aboute with his naked swerde in his honde. And so *dud* sir

Brewnor the same wyse to his lady. 313/37 (Cx And there with sire Tristram shewed la beale Isoud/and tordned her thryes aboute with his naked swerd in his hand And whanne syre Breunor sawe that he *dyd* the same wyse *torne* his lady 311/34)—これは次章における 1) の④—⑭の例文と比べ合わすと興味深い—。

以上(A)~(E)と(F)~(H)の二点が **W** と **Cx** との大きな相違であり, Caxton がこのような修正を印刷の際使用した MS. に加えたことが推定される。他の異同(I)(J)は *did do x* の一つが *do* の他の synonym, *let* に置き代えられている場合で, これは Caxton の英語に, *did do x* と同時に時々現われるもので, *did do x* の項で述べたのと同種の現象であると考えてよからう。

(I) **W** に対応個所なし, **Cx** は *let acc do x* (1例, Bk V内)

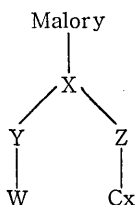
Cx And them that were hurte he *lete* the surgyens *doo serche* their hurte and woundes/and commaunded to spare no salues ne medecynes tyl they were hole 174/15)

(J) **W** の *let x* が **Cx** の *let do x* に (1例, Bk V の範囲内)

W And anone the kyng *lette cry* asawte unto the towne, 173/15 (**Cx** And thenne anon the kyng *lete do crye* assaulte to the cyte 180/36)

3

我々は Caxton の書換えの意図を以上のように推定して来た。他の部分については, Winchester MS. 欠如の為 **Cx** との比較が不可能な(K)(L)と後述の(O)を除けば, (M)~(S)は **W**, **Cx** (第2図) の両方が同一である。Winchester MS. と Caxton 版の関係は第二図(Vinaver, Vol. I, P. xci より)の如くであるから, 同一の部分が必ずしもマロリーの original なものであるとは限らないし, **Cx** と相違する **W** の部分についても同様である。しかし, X, Y, Z 共に現存しないし, **W** は多くの点で **Cx** より complete で authentic であることが証明されているので, **W** によってマロリー自身の *do*-form の用法を推定することにする。第一表の図には示されていない, 細かい **Cx** との相違についてもその際ふれてゆく。



1) *do x* について (その1)

do xp と *do xc* との区別は, *do* の主語によって示される人物が, *x* によって示される行為を自ら行うか, 第三者に行わすか, 文脈によって判断する以外になく, 曖昧さが生じ易く, 区別不可能なものも存在する可能性も多いが, 次の①②は明らかに, *do xc* である。

(又③も恐らく *do xc*)

① (A) **W** 38/4, **Cx** 62/9 (カッコ内は第一表の対応。例文はすでに例示したため略。以下同様)

② (M₁) **W** she wolde *do make* the vessell redy and all maner of thyng to purpose 504/29 (= **Cx** 498/8) (Mであるから **Cx** も同一であるが, *did do x* の構文は *did* が過去時制の場合に限定されており, ここでは *would do x* のため *did do x* へ改訂が加えられなかったものであろう。)

③ (M₂) **W** Ye woll *do make* a cry ayenst the Assumpcion of Oure Lady 254/21 (= **Cx** 254/26)

他は大部分が *do x p* であり、マロリー自身は *do x c* より *do x p* を愛好する言語習慣であったことが推定される。マロリーの *do x p* を考察するにあたって、まず次の例をみることにする。

- ④ (M₃) **W** Than quene Gwenyver comended hym, and so *did* all good knyghtes, <and> *made* much of him, excepte sir Gawaynes brethirne 491/26
(**Cx** Thenne Quene Gueneuer commended hym/and soo *dyd* alle other good knyghtes *made* moche of hym excepte sire Gawayns bretheren 485/3)

この例は厳密には *do x* でなく「*do*+定動詞」であるが、便宜上 (M) に分類してある例である。**W** における <and> は Vinaver の emendation によるもので、¹¹⁾ これも、又その前の comma も、MS. にはないものであるから、**Cx** を参考にすれば「*do*+定動詞」の構文とみなすことも出来よう。O. E. より15世紀に至る迄、この「*do*+説明的内容をもった定動詞」の構文は存在している。例えば Engblom (P. 45) より一、二例を拾えば次のようなものがある。① *Dis wored is cleped se·pe floweð and ebbeð·swo doð ec þis wored floweð·þanne he wored-wunne 3ieueð·and ebbeð: þanne hie hit eft binimeð; ② swo doð pis mannisse flieð fram iuele to werse.* Engblom はこれを代動詞の *do* とみなし、強調構文の原形をこの構文に求めている。一方 Engblom とは異なり Ellegård はこうした構文を、単に *do x p* への第二次的な促進的要素と考えている。この構文の *do* は、後に現われる定動詞に先行して、その内容を包括的にあらかじめ述べる役目を果しているが、*do* に先行する文脈にその定動詞と同一の動詞が現われる場合(イ)と、そうでない場合(ロ)があり、Engblom は(イ)(ロ)共に *do* を代動詞と考えているが、Ellegård は(イ)のみを代動詞と考え、(ロ)は main verb とみなしている (cf. Ellegård P. 138) しかしその borderline は明確でなく、上の④ (M₃) の例も、*do* の後に現われる定動詞と同一の動詞が *do* の前に現われないが、意味の上からは *commend* も *make much of* も大体同意義であり、広い意味ではこれも代動詞とみなしてよからう。マロリーの *do x p* の特徴の一つは、こうした代動詞に由来するものが多いことであり、次のものは定動詞が、不定詞となって完全な *do x p* の段階となっている例である。その例として、*so+do x* で、*x* と同一の動詞が前の文脈に現われる場合 (但し⑤はやや特殊であるが) をまず例示する。

- ⑤ (M₄) **W** lyke as Terquyn wacched to dystresse good knyghtes, so *dud* this knyght *attend* to destroy and dystresse ladyes, damesels and jantyllwomen 194/18 (= **Cx** 197/25)

- ⑥ (M₅) **W** but the deuke……bade sir Gareth alyght and fyght with hym. So he *dud alyght*, and they dud grete batayle togedyrs more than an houre 267/3 (= **Cx** 266/23)¹²⁾

- ⑦ (M₆) **W** 'now chose hir at your adventure.' And so sir Bleoberys *dud chose* sir Segwardes wyff, 298/7 (= **Cx** 296/6)¹³⁾

- ⑧ (M₇) **W** And, pardé, sir Gaherys, ye know me well inow by my shyld, and so *do I know* you by youre shyld 405/37 (= **Cx** 401/31)

S₁ はないが次のものも同様の例である。

- ⑨ (F₁) **W** But and ye be slayne I woll take my dethe as mekely as ever *ded* marter *take* hys dethe for Jesu Crystes sake 822/33 (**Cx** as euer *dyd* ony crysten Quene 801/31)

次の例は、*do x* の *x* と同一の動詞が *do* に先行しないが、内容的にはほぼ同意義の動詞が先行する場合である。

⑩ (M₈) **W** And I may lykyn the good knyght Galahad unto the Sonne of the Hyghe Fadir that lyght within a maydyn and bought all the soules oute of thralle: so *ded* sir Galahad *delyver* all the maydyns oute of the wooful castell. 651/15 (=C_x 636/6)

⑪ (M₉) **W** 'Brothir, here ys com a knyght that my harte gyvyth gretly unto.' 'Fayre syster,' seyde sir Urré, 'so *doth* my harte *lyghte* gretly ayenste him, and my harte gyvith me more unto hym than to all thes that hath serched me.' 813/27 (=C_x 793/33)

次の⑫ (N), ⑬ (O) も、**W** に関してはこの範疇に入れるのが一番適当であるように思われる。尤も色々な解釈は可能で、例えば Engblom (P. 62) は⑫ (N) の C_x を *did do x* の変種であると考え、そのように分類例示している。Caxton のような *do x c* を好む言語習慣の人にとっては、あるいはそう感じられたかも知れない。けれども **W** のように迂言の *do* がかなり使用されている MS. に関しては、上述の⑤—⑩と同種のものとするのが適当である。尚 Ellegård は⑫ (N) については、P. 246 で equivocal なものに分類している他は、何も述べていないが、⑬(O) の **W** については、P. 246 で equivocal なものとして分類しながらも P. 139 においては本稿と同様の立場をとっている。

⑫ (N) **W** "……And whan ye have made all thys I shall lette make a gurdyll thereto, such one as shall please me." 'So all thys kyng Salamaon *ded let make* as she devised, bothe the shippe and all the remenaunte……' 712/30 (=C_x 698/3)

⑬ (O) **W** and so thus he *ded lete make* and *countirfete* lettirs from the Pope, 502/17 (C_x Lo thus he *dyd*/he *lete make* and *counterfete* letters from the pope 495/34)

否定文、*do not x* は全篇を通じ一例見出されるみで、しかも **W** が欠如している部分であるから、**W**, C_x の対応は分らないが、C_x では次のようになっている。もし **W** も同一だったと仮定すれば、上と同一の範疇に入れられよう。

⑭ (L) C_x ye be to blame/for ye dysplese god with suche maner of sorow making/Truly sayd syr Launcelot I trust I *do not dysplese* god 857/32

このようにマロリーには、代動詞から発達したと思われる type の *do x* が多いのが特徴であるが、ここで一言つけ加えたいのは、このことが *do x p* の起源を代動詞に求めようとする古い議論をくり返す材料になるということではないということである。代動詞からの発達と思われる type の *do x* が広まったのは漸く15世紀になってからであり、一方 *do x p* の発生は13世紀後半にさかのぼり、これとは異なった sentence type で現われている。要するに、「*do*+不定詞」の構文は *do x p* の発生に対する contributing factor にすぎず、主たる発生の原因をそこに求むべきではないと思うが、*do x p* の拡大に従って、こうした構文も *do x p* に合流したものと考えられよう。

前に一寸触れたように、Engblom は一般に代動詞起源の *do x* を強調的とみなしている。勿論代動詞の *do* は元来強調の要素を含み持つものであるから、上述の一連の例も *do* が強意を担っている可能性はある。しかし古い資料の場合、書かれたテキストからは、特定な場合を除いては、強調の問題は確証出来ないから、推定の域を出ないことは云うまでもない。

2) *do x* について (その2)

以上の他の *do x* は、不定詞に *do* が直接先行しているものが大部分で、代動詞からの type という制約のない *do x p* である。この type の *do* のほとんどが過去形であることから、*did x* は過去時制形成の手段として使われたものであろう。

- ① (F₈) **W** 81/8 (**Cx** なし 109/6)¹⁴⁾ 例文既出。
- ② (F₁) **W** 93/3 (**Cx** は単純形 119/37) 例文既出。
- ③ (M₁₀) **W** and thou *dydyste leve* that swerde quene Gwenyvere sholde thou never se. 203/35 (= **Cx** 207/4)
- ④ (M₁₁) **W** all the trouthe sir Gahalantyne *dud telle*, and sir Mador de la Porte, and sir Mordred, for they were at the same turnement. 209/26 (= **Cx** 212/24)
- ⑤ (M₁₂) **W** but ever the nakyd placis they *dud defende* 239/3 (= **Cx** 238/31)
- ⑥ (M₁₃) **W** but he abought hit full sore or he *did aspye* his fyghtynge 239/5 (= **Cx** 238/34)
- ⑦ (M₁₄) **W** But I mervayle, …… that sir Kay *dud mok* and *scorne* hym and gaff hym to name Bewmaynes 253/24 (= **Cx** 253/28)
- ⑧ (M₁₅) **W** and there she *dud staunche* sir Gareths woundis and sir Gawaynes. 268/5 (= **Cx** 267/28)¹⁵⁾
- ⑨ (M₁₆) **W** 'A, sir, remembir ye nat of the fall ye *dud gyff* me onys, and aftir that ye refused to fyght on foote with me?' 334/11 (= **Cx** 332/3)
- ⑩ (M₁₇) **W** And he thanked them, and so was he lorde, and worhyfully he *dud governe* hem. 336/25 (= **Cx** 334/11)
- ⑪ (F₃) **W** 349/8 (**Cx** 単純形 346/14), 例文既出。
- ⑫ (M₁₈) **W** And than he *ded bydde* sir Gaherys 380/9 (= **Cx** 376/13)
- ⑬ (M₁₉) **W** and the remenaunte that abode he wounded hem sore, all that *ded abyde* 388/27 (= **Cx** 384/26)
- ⑭ (M₂₀) **W** Ryght so cam in sir Persides and sir Trystram, and so *ded fare* that day that they put the kyng of North Galis abacke. 389/10 (= **Cx** 385/8)
- ⑮ (M₂₁) **W** he…*dede make* a strange clarke to brynge tho lettirs unto kyng Marke 502/17 (= **Cx** 496/1)
- ⑯ (M₂₂) **W** sir Trystram *ded double* so mucche dedys of armys 554/3 (= **Cx** 544/14), *do acc x*?
- ⑰ (M₂₃) **W** Than loked sir Launcelot up to the hevyn and hym semed the clowdis *ded opyn* 674/8 (= **Cx** 659/4)
- ⑱ (M₂₄) **W** kyng Arthure aspyed hym as he *dud walke* in a gardeyne besyde the castell 758/15 (= **Cx** 739/27)
- ⑲ (F₇) **W** 770/24 (**Cx** 751/21), 例文既出。
- ⑳ (M₂₅) **W** And hartely she prayd hir fadir that hir brothir myght wryght a lettir lyke as she *ded endite*, and so hir fadir graunted her. 779/28 (= **Cx** 760/19)¹⁶⁾
- ㉑ (M₂₆) **W** And anone as he *ded awake* he waved foyned at sir Launcelot

as he lay, and seyde, 859/25 (=Cx 838/19)

次の例は単に過去時制形成のためばかりでなく、頭韻詩 *Morte Arthure* の焼き直しの部分のため、頭韻上の手段としても役立っている。

㉓ (M₂₇) **W** he …… dredmed how a dredful dragon *dud drenche* mucche of his peple 142/32 (Cx hym semed that a dredeful dragon *dyd drowne* moche of his peple 165/3) 尚頭韻詩の原文¹⁷⁾は次のようになっている。Hym dremyd of a dragon, dredful to beholde, /Come dryfande ouer pe depe to drenschen hys peple, …… (ll. 760—761)

この type で過去形以外のものはわずか 4 例のみである。

㉔ (M₁₈) **W** And also I am sure, as sone as my lorde kyng Marke *do know* you he woll banysh you. 374/30 (=Cx 371/14)

㉕ (F₂) **W** 189/32 (Cx なし 193/3), 例文既出。

㉖ (F₄) **W** 400/36 (Cx 単純形 397/1), 例文既出。

㉗ (F₅) **W** 875/32 (Cx 単純形 853/35), 例文既出。

又次の二例は副詞と関連して使用されている。

㉘ (M₂₉) **W** now *do* I *undirstonde* that ye love my mortall enemy 452/21 (=Cx 446/10)

㉙ (M₀) **W** For, lyke as wynter rasure *dothe* allway *arace* and *deface* grene summer, so faryth hit by unstable love in man and woman, for in many persones there ys no stabylité, 790/32 (=Cx 771/13)

これらの *do x p* が強意のためのものであるか否かについて一言する。強意の *do* は無強勢の *do x p* から徐々に発達したが、Ellegård (P. 192) によれば 15・16 世紀にはまだまれであった。例えば、動詞の現在形又は過去形を同一動詞の他の時制に対照して示す必要から *do* が使用されたり、他の助動詞と対照的に用いられったり、強意のために *do* が動詞に後置されたりする等、文の構造から *do* の強意を明白に示す場合があるが、上の一連の例文で、こうした明らかな例は見当らない。強意を担っている例が存在する可能性はあるにしても、時制(特に過去)の形成という以外は格別の修辭的理由もなく、単一の動詞と同価値に用いられている *do x p* が大部分であろう。

3) 疑問文における *do* について

マロリーでは、疑問文は大部分主語・述語動詞の倒置により形成されており、未だ *do*-form は popular でないが、次の数例が見出される。注意すべきはそのすべてが他動詞の場合ということである。疑問文における *do* の導入は、一般に、inversion を避けようとする傾向に関係があるとされている。特に S V 倒置によって、動詞の後に、S と O が並ぶ不便さを避けるために *do* が使用されたと考えられている。そのため、S V 倒置をしても、こういう不便さのない自動詞の場合や、他動詞でも object の先行する疑問文 (ex. what said he?) では、*do* の使用は少なく、他動詞のその他の場合が初期のものには多いというのが Ellegård の説明 (P. 202) であるが、マロリーに現われる疑問文の *do* はかかる場合ばかりで、この説明に合致している。

① (G) **W** '*doste* thou *know* this contrey or ony adventures that bene nyghe here honde?' 181/22 (Cx 倒置形 184/30)

② (R₁) **W** othir ellys *ded* ye ever *rejoyse* her in ony plesure? 569/15 (=C_x 559/3)

③ (R₂) **W** sithyn ye know in sertayne, wherefore *do* ye *aske* hit me? 636/26 (=C_x 622/12)

④ (R₃) **W** 'Why say ye so?' seyde the quene, '*Do* ye *forthynke* youreselff of youre good dedis? …' 799/12 (=C_x 779/33)

現在の用法では、疑問詞の主語で始まる直接疑問文では *do* は使用されないが、初期の段階ではかかる場合にも現われることがあり、マロリーにも一例見出される。

⑤ (R₄) **W** 'A, false knyght and traytoure unto knysshthode, who *dud lerne* the to distresses, ladyes, damesels and jantyllwomen?' 194/9 (=C_x 197/17)

Engblom (P. 40) は、こうした例文を根拠にして、inversion の回避が、疑問文における *do* の用法の確立の原因であるとみなすことに批判的な態度をとっているが、ただマロリーのような例文の場合、*do* が疑問文の要素としてその機能を果たすというより、むしろ肯定平叙文に現われる *do x p* と同種のものであるとみなすことが可能であるように思われる。

次に⑥ (R₅) の例を Ellegård (P. 140) は main verb *do* と解し、'Woman why dois þou þus/To make vs more myscheue (*York Plays*)' のような例文と同一の構文とみなしている。

⑥ (R₅) **W** why *ded* ye so *to-smyte* adowne soo good a knyght as he ys, and namely whan I had ado wyth hym? 558/7.

しかし *to-smyte* における *to* は inf. の sign というより強意の prefix¹⁸⁾ と考えて差しつかえないように思われる。尚 C_x ではこの個所は、why *dyd* ye *smyte* doune soo good a knyght as he is 548/11, となっている。

最後に次の例は **W** の欠如のため対個関係は不明であるが、C_x では *do* が使用されている。

⑦ (K) **C_x** why *dyd* ye *awake* me 859/2

4) *do never x* について

M. E. では軽い強勢の副詞は動詞の後におかれることが普通であった。15・6世紀の間にそれ迄 postposition の副詞が anteposition をとることが次第に多くなってはいたが、postposition をとることが依然として普通であった副詞が、何らかの理由で anteposition をとる時は、*do* を伴うことが多くなった。マロリーの頃はすでに、*never* は anteposition も多くなっており (Ellegård P. 184 の図表では約40%位)、一般的に言えば当時 *never* が *do* を伴うことが目だって多いというわけではないが、マロリーの作品では次のような例が見出される。

① (Q₁) **W** for so fowle and so shamfully *dud* never woman *revyle* a knyght as I have done you 229/22 (=C_x 229/26)

② (Q₂) **W** but he gaff hym such a buffette that he *dud* never *recover* 265/27 (=C_x 265/17)

③ (Q₃) **W** she *ded* never *hate* hym more afftir but ever loved hym …… 280/14 (=C_x 277/18)

④ (Q₄) **W** I *ded* never *hurte* hym 406/21 (=C_x 402/11)

5) *do acc x* (特に *do one to wit*) について

1)–4)で観察してきたように、マロリーの *do x* の大部分が迂言の用法で、*do x c* との抗争という観点から言えば、後者は大幅に後退した状態になっている。そして *do x c* の代り

として、意味上の曖昧さを生じない *let x* の形式が好まれている。ちなみに統計的数字を示せば、*do x c* が上述の 3 例であるのに対し、*let x* は約 150 例見出され、その他 *make x*, *gar x* も若干みられる。一方使役の *do* は、*do x p* との意味上の抗争の生じる可能性のない *do acc x* の構文においてはまだかなり残存していたと予想される。しかしこの場合もほとんどは *do one to wit* という相当後の時代迄生き残った慣用句としてであり、この構文においても使役の *do* の衰退がみられる。

① (S₁) **W** Also, sistir, mesemyth ye myght *have done* me *to wete* of his commynge, 252/35 (=C_x 253/3)

② (S₂) **W** And than kynge Marke sente unto sir Malhalte and *dud* hym *to wete* that a bettir man borne then he was hymself sholde fyght with hym, 283/26 (=C_x 281/4)

③ (S₃) **W** And he bade me *to do* you *to wyte* that he woll be youre mortal foo in every place 331/18 (=C_x 329/22)

④ (S₄) **W** In the name of God …… I *do* you veryly *to wete* he ys nat dede, 728/1 (=C_x 712/12)

⑤ (S₅) **W** 'Now go thou, sir Lucan,' seyde the kynge, 'and *do* me *to wyte* what betokyns that noyse in the fylde.' 869/2 (=C_x 847/22)

⑥ (S₆) **W** And uppon payne of my lyff he shall encheve the Sankgreall, ryght as sir Launcelot *had done* us *to undirstonde*. 631/33 (=C_x 617/18)

⑤ (S₅) は *do one to wit* と同意義であるからそれを除外すれば、*do one to wit* 以外の例は次の一例のみである。

⑦ (C) **W** Merlion *dud* hys *mayster Bloyee wryte* them. 29/35 (C_x merlyn *dyd* his *maister Bleyse do wryte* 62/9), 尚 2 章の (C) においても例示。

4

以上を簡単に要約すると次のようになろう。まず **W**, **C_x** 間の関係については、

1. **W** がマロリーの original なものを忠実に残しているとすれば、マロリーは迂言の *do* をかなり使用する習慣であったと推定される。使役の *do* に愛着を持っていた Caxton は、こうした MS. を印刷に附す際、MS. にわずかに現われる *do x c* を *did do x* と強化し、*do x p* と形式上分化している。彼自身が全面的に書き換えを行った BK V にはこの傾向が特に著しい。

2. 更に Caxton は MS. に現われる迂言の *do* を印刷の際単純形に書き換えることもかなり行い、そこに見出した *do x p* を減少させている。

次に **W** の *do*-form に関しては、

1. **W** の用法には代動詞の *do* から *do x p* への一般的傾向へ合流したと思われる例がかなり多い。

2. 1 で述べた以外の *do x p* (不定詞が直接 *do* が先行の場合) に関しては、特に過去時制の形成のために *did x* が使われた。この場合現在形の *do x* はわずかである。

3. *do never x* は多少現われるが、所謂否定文の *do not x* は **W** には皆無である。一方疑問文に *do* が使用される場合、他動詞の例ばかりである。*do* はこの場合 S と O が V の後に共に並ぶのを回避するのに役立っている。

4. *do x p* と *do x c* との抗争に関しては、**W** では圧倒的に *do x p* が多い!¹⁹⁾ *do x c* に代って *let x (make x, gar x)* が用いられている。

5. *do x p* との混乱の恐れのない *do acc x* において使役の *do* は多少残存するが、この場合も、当時慣用的なものとして生き延びていた *do on: to wit* がほとんどで、使役の *do* の勢力は強くない。

(附記) 本稿は日本英文学会中部支部第十八回大会 (1965・10・2 於福井大学) における発表に加筆訂正を施したものである。

注

- 1) H. Oskar Sommer (ed.), *Le Morte Darthur by Syr Thomas Malory: The Original Edition of William Caxton Now Reprinted and Edited with an Introduction and Glossary*, 3 vols., London 1889-91.
- 2) Eugène Vinaver (ed.) *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols., Oxford 1948². 尚本文中の引用文には本書の One volume edition (Oxford Edition of Standard Authors) のページ数・行数を示す。
- 3) 「指示代名詞の語形—Malory を中心に」(ことばと文学・第二号, 1963)。
- 4) 「Malory における動詞の屈折語尾」(*IVY, The Nagoya Review of English Studies*, 第三巻, 1963)。
- 5) Baldwin, C. S., *The Inflection and Syntax of the Morte D'Arthur of Sir Thomas Malory, A Study in Fifteenth-Century English*, Boston 1894, PP. 266—268.
- 6) Sommer, Vol. 2, P. 38.
- 7) Engblom, V., *On the Origin and Early Development of the Auxiliary Do*. Lund 1938.
- 8) Ellegård, A., *The Auxiliary do; The Establishment and Regulation of Its Use in English*, Göteborg, 1953.
- 9) cf. Ellegård P. 124.
- 10) 岐阜大学研究報告 (人文科学) 第九号, 1960, PP. 16—24.
- 11) Vinaver (P. 1493) は <and> の挿入につき次の説明を加えている。“Modern editors emend *made to make*. But the omission of *and (&)* after an abbreviated plural ending is an even more likely scribal error than the substitution of *d* for *k*.” しかし *and* の挿入を認めず、「*do*+定動詞」であるとする見方も存在するわけである。尚「*do*+定動詞」構文一般については、Rynell, A., *On Alleged Constructions like did wrote (Studier i mo: ern Språkvetenskap, ny serie, Volym II, Stockholm 1964, PP. 132—147)* 参照。本例文の解釈上の色々な立場についても、この書の P. 134 でとり上げている。
- 12) Ellegård (P. 262) はこの例文に 'emph(pro?)' と記している。Engblom (P. 90) も又この例文に 'Emphatic?' と記し、強調の *do* の可能性を考えている。一方 Sommer は彼の edition の glossary の "alyghte" の項でこの例の *alyghte* を過去分詞と述べているが、Engblom (P. 90) は不定詞だと反論している。筆者も不定詞と考えたい。
- 13) Engblom (P. 90) はこの例を例示し、"emphatic? Very Uncertain; *dyd* probably only marks the tense" と述べている。
- 14) Ellegård (P. 246) はこの例を迂言の *do* かと疑いながらも equivocal な例として分類している。
- 15) 文脈より 'she' なる人物が自ら 'staunche' したと考えられるから *do x p* に分類した。Engblom (P. 90) もこれを *do x p* と考えている。尚 Wynkyn de Worde の版では、'staunched' と単純形になっている。
- 16) Ellegård (P. 246) では本例文を equivocal なものとして取り扱っている。
- 17) Björkman, E., (ed.) *Morte Arthure*, Heidelberg 1915, P. 23.

- 18) 例えば N. E. D., **To-**, *prefix*² の項参照。"2. Used as a mere intensive: Completely, entirely, soundly, greatly, severely, etc.,……† **to-smite** *V.*, to smite violently..."
- 19) 尚第一図の (P), 即ち W, Cx 共に *make do x* の例 (W Kyngge Pellam off Lystenoyse *hath made do cry* in all the contrey a grete feste 62/29=Cx 92/9) は筆者にとって, *do x p* か *do x c* かに関して, ambiguous な例である。

On Malory's Use of *Do*-Form

Yuji NAKAO

The paper deals with two problems: ① To compare the use of *do*-form between the Winchester MS. (W) and Caxton's edition (Cx) in order to make clear what revision Caxton made to his edition. ② To describe some characteristic features of *do*-form in W, and infer how Malory used *do*-form. (N. B., W is not Malory's original, though W is proved to be more complete and more authentic than Cx in many respects).

The results arrived at may be summarized as follows. ① i) While *do x* is seldom used in a causative sense in W, Cx is characterized by the use of *did do x*, a reinforced form of causative *do x*, which shows Caxton's preference for causative *do*. Particularly conspicuous is Bk V in Cx, where Caxton completely rewrote the text by himself. ii) Some examples of periphrastic *do* in W correspond to simple verb forms in Cx. Caxton may have reduced the number of periphrastic *do* he found in MS. ② i) The great majority of *do x* instances in W are to be considered as periphrastic. ii) W has many examples of *do x* which can be thought to have developed from '*do*+explanatory finite verb'. iii) Most of the examples of *do x* other than those referred to in ii) seem to be used only to mark the past tense. iv) Except some examples of *do never x*, *do not x* is not found in W (though there is one in Cx.) v) We find *do x* in questions several times. All of them appear when the verb is transitive. vi) Causative *do x* is almost absent in W, and *let x* is mainly used instead. It is expected that causative *do* is still used in the construction, *do accusative x*, where polysemic conflict with periphrastic *do x* would not arise. But upon inquiry, we find that it persists only in the fixed phrase, *do one to wit*. Here, too, the disappearance of causative *do* can be seen. (*x*=infinitive)